

羽衣学園短大 坂上 敏子

家政学研究の基礎学として、当初は化学・生物学などの自然科学を考慮し、ついで生理学・心理学ことに児童心理学をもその素材として取り入れ、のちには社会科学をもこれに加えるようになった。その中でも経済学的重要性が認められ、近時には社会学において現実の家族の問題が科学的に究明されるようになった結果、夫婦・親子・兄弟を包括する家族関係が新たに家政学の重要な一分野となったことは周知の事実である。戦後青少年の非行が社会病理現象として注目されてきた。その原因の1つとして家族関係の欠損、崩壊があげられることは1つの常識とさえなっている。非行少年の問題を法律学者や社会学者にのみゆだねるべきではなく、家政学研究者として真剣に取り組むべきであると考え、各種統計資料を基礎として考察した。が、問題は潜在的な欠損家庭を注意しなければならない。非行少年対策を家政学の立場から樹立するために、少年少女の家庭への満足度、不満足度を調査し、調査の結果によって不満の箇所を追究し、かかる不満の原因を考察し、その除去への具体的施策の発見を企図したのである。

調査対象として大阪府下の小・中・高校生1000名に解答を求めた。

調査の結果、樹立された具体策は砂上の楼閣であるかも知れないが、家政学研究者として情熱的に問題に対決し、今後の家政学に貴重な指針を得た事は記述できよう。調査に関する詳細は発表時配布する印刷物に記述します。